



子どもの学力向上に向けて、家庭・学校・地域でできることを考える 令和7年度学力向上フォーラムが開催されました



2月8日(日)鹿島市民文化ホール SAKURAS において、鹿島市 PTA 活動・鹿島・太良地区少年の夢合同発表会、鹿島・太良地区学力向上フォーラムが合同で開催されました。保護者、教職員、教育関係者など、250名の参加者がありました。



【講演】「主体性をどう育てるか 鹿島・太良の教育の未来と可能性」

講師 長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科 浦郷 淳 准教授

浦郷准教授は、佐賀大学を卒業後、佐賀県内の小学校・中学校で教員として勤務し、現場での豊富な実践経験を積み、学校現場に精通された方です。2021年より長崎国際大学に着任され、現在は小・中・高等学校の教員と連携した実践に基づく共同研究を行うとともに、次世代の教員養成にも携わられています。

本講演では、急速に変化する社会の中で、子どもたちの「主体性」をどのように育てていくかについて、学校・家庭・地域の役割を踏まえながら御講演いただきました。

○「自主」と「主体」の違いについて

自主とは、指示がなくてもやるべきことに取り組む態度であり、主体とは、自らの意思と判断に基づき、自分の責任で行動しようとする態度である。

学校ではこれまで自主的活動は多く行われてきたが、今後より重要なのは、子ども自身が「やってみたい」と思い、一歩踏み出す主体性である。

大人は経験があるがゆえに、子どもに最短の正解を示しがちである。しかしそれは、子どもが考え、試行錯誤する機会を奪い、「言われたからやる」姿勢を強めてしまう。主体性は、大人が先回りすることで失われてしまう可能性がある。子どもが踏み出そうとした瞬間を止めず、支えることが重要である。

また、子どもは授業内容以上に、大人の言葉遣いや態度、関わり方を通して「大人の姿」を学んでいる。家庭や学校での大人の在り方そのものが、子どもの学びの基盤となる。主体性を育てる上で重要なのは、「伝えたか」ではなく「伝わったか」である。子どもは言葉を十分に持っていないため、伝わる言葉で語りかけること、そして子どもの小さな気づきを見取り、価値づけることが求められる。特に「ほめる」ことは、子どもが動き出す大きなきっかけとなる。

○主体的に行動すれば、失敗は避けられない

失敗は「うまくいかなかった経験」ではなく、「この方法ではうまくいかなかったと分かった経験」と捉え直すことができる。そのためには、他者との比較ではなく、その子自身の伸びを見る「個人内評価」と、失敗しても大丈夫だと感じる安心感のある環境が不可欠である。

○生成 AI の普及や学び方の多様化など、社会は大きく変化している

大人が知っていることだけを教える教育には限界があり、子どもと共に学ぶ姿勢が必要となる。成果(点数や作品)だけでなく、課題の持ち方や学びのプロセスに目を向けることが、これからの学力向上につながる。

鹿島市・太良町には、自然や地域資源、子どもに関わる多くの大人という大きな強みがある。リアルな体験を積み重ね、子どもの一歩を地域全体で支えることが、教育の未来と可能性を広げていく。

